北海道帝国大学理学部の創設と同学部地質学鉱物学教室の草創のころ*

原 田 準 平

Foundation of Faculty of Science, Hokkaido Imperial University,
and the Early Years of Department of Geology and Mineralogy

Junpei HARADA

I. 序

この度東京地学協会より同協会の「地学雑誌」に北海道帝国大学理学部及同学部地質学鉱物学教室の設置につにつき、その経過について一文を草する様御懇請をうけた。同教室の設立当時在職した教授の中、鈴木教授は昭和35年定年退官し、北海道帝国大学名誉教授になられた。東京に移られ昭和45年御逝去、長尾教授は昭和16年東北帝国大学に転出され昭和18年仙台にて御逝去、上床教授は昭和15年東京帝国大学工学部に転出し、現在東大名誉教授として御健在である。私は昭和37年定年退官、同年北海道大学名誉教授となり、更に旭川工業専門学校校長になり、昭和45年まで勤めた。従って北海道大学に関係を有するものは私一人になってしまった。北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室の詳細につき語ることの出来るのは私一人になってしまった。

北海道大学理学部も創設以来既に53年を経過した。私の在職は昭和6年以来昭和37年までの31ケ年であった。旧大学令による北海道帝国大学理学部より、大戦後に大学令が改正され、北海道大学理学部になるまでの間私は同学部に在職したことになる。この度の論文には北海道帝国大学理学部が昭和5年設置され、理学部地質学鉱物学教室の草創のころ（昭和5年より10ケ年間）の思い出を

記することにした。

北海道大学の創基100周年記念式は昭和51年に、また理学部は創設50周年記念式を昭和55年に夫々行われた。

50余年以前の思い出を記するので多少の記憶の間違いがあるかも知れないと考え、“北大百年史”¹⁾及び“北大理学部五十年史”²⁾を参考としてその完璧を期した。

II. 北海道帝国大学の概要¹⁾

北海道帝国大学はその歴史が古く、昭和51年創基100周年を迎えた。ここで同大学の創立以来の概要を先づ記する。

明治5年東京芝増上寺内に北海道開拓使により開拓使仮学校が設置されたが、その学校は明治6年に組織再編成のため閉鎖された。同年再び開校されたが、明治8年開拓使仮学校を札幌に移すこととなり、校舎の建設に着手した。同年7月開拓使仮学校を札幌に移し、札幌学校と改称した。そして同年9月7日に開校式を挙行了。翌9年米國マサチューセッツ農科大学の規模に則り、校則に大きな改正を加えた。そして本科の修業年限を4年に、予備科の修業年限を3年とした。そして卒業生には農学士の学位を授与する様学制を定めた。その上札幌農学校と改正し、明治9年8月14日に開校式をあげた。明治15年2月開拓使は廃止

* 日本地歴史資料調査委員会の計画の一環として、夫々の大学の地学関連教室の設立などに関する記録を当時の事情に明るい諸先生に執筆をお願いすることとしている。これはその一つとして、北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室の設立の特殊性につき、当時設立の任にあたられた原田先生にお願いしたものである。

(湊 秀雄記)

されたので、同年3月本校は農商務省の所管となった。

明治18年札幌農学校の廃止論が北海道三県を視察した金子堅太郎（大政官大書記官）によって報告された。明治19年1月札幌、函館、根室の三県が廃止され北海道庁が置かれた。明治19年2月札幌農学校は北海道庁の所管となった。

札幌農学校第1回卒業生であった佐藤昌介は卒業後二ヶ年アメリカに自費留学し、明治19年に帰朝した。佐藤昌介は帰朝するや北海道長官岩村通俊に北海道開拓のため農学校が如何に必要なかを力説した。明治24年佐藤昌介は農学校の校長心得となった。

やがて来る日清戦争に備えての政局の不安定、軍備拡張のため一般財政は極度に切り詰められた。そのため道庁予算も大削減、農学校の経営存続は危ぶまれた。当時校長心得であった佐藤昌介は上京し、要路の高官連中に運動し、農学校は諸経費節減することでこの件は落着いた。明治27年4月佐藤昌介は校長に任ぜられた。

明治28年札幌農学校は文部省の直轄学校となった。明治29年に修業三年制の土木工学科が設置された。そして明治36年に実用専門学校に指定された。

明治40年に札幌農学校は東北帝国大学の農科大学と改められた。明治45年に東北帝国大学農科大学に農学実科、林学実科、土木工学工業科、水産学科が設けられた。

大正7年札幌に帝国大学が置かれることとなり、東北帝国大学農科大学は北海道帝国大学農科大学となった。

そして大正8年に北海道帝国大学の従来の農科大学は農学部となり、そして医学部が置かれることとなった。そして修業年限3年の附属大学予科、附属土木専門部、附属水産専門部農学実科、林学実科の規定が定められ夫々が設置された。

大正11年より医学部の授業が開始された。大正12年附属大学予科は予科と改められた。大正13年に工学部の設置が決められ、大正14年より授業が開始された。昭和2年理学部設置の件が3ヶ年継続事業として貴衆両議院の協賛を得て成立した。

昭和4年第16臨時教員養成所（博物科）が認め

られ、同年4月より授業を開始した。しかし昭和7年3月末日で廃止された。

昭和5年理学部が設置された。その学科は数学科、物理学科、化学科、地質学鉱物学科、植物学科及び動物学科の6学科であった。昭和15年臨時医学専門部が設置された。（後に附属医学専門部と改められたが昭和24年に廃止された）。昭和16年低温科学研究所が附置された。昭和18年に超短波研究所（後に応用電気研究所と改名）及び触媒研究所が附置された。

昭和22年、従来の大学令は廃止され、帝国大学官制は国立総合大学官制に改められ、そして北海道帝国大学は北海道大学と改称された。同年法文学部の設置が決められた。この法文学部は後に文学部（昭和25年）、教育学部（昭和24年）が分離し、法経学部となり更に法学部と経済学部（昭和28年）とに分離した。

昭和24年に附属土木専門部、附属農林専門部、附属医学専門部はいづれも廃止された。また函館水産専門学校は水産学部として北海道大学に包括された。そして昭和26年に一般教養科が一般教養部と改称された。昭和27年に獣医学部、昭和40年に薬学部、昭和42年歯学部の増設が制定された。更に昭和56年に医療技術短期大学部が併立された。

以上により現在の北海道大学は、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、農学部、獣医学部と水産学部の12学部と医療技術短期大学部とによって構成されている。その他各部に研究科（大学院）が設置されている。それに加えて環境科学研究科（昭和52年設立）が設けられている。合計13の研究科（大学院）がある。

そして大学附置の研究所は低温科学研究所（昭和16年）、触媒研究所（昭和18年）、応用電気研究所（昭和21年に超短波研究所が改名）、免疫科学研究所（昭和25年に北方結核研究所として設置されたが昭和49年に改名）の合計4個がある。それに加えて言語文化部（昭和56年に設立）がある。さらに40の教育研究施設、14の学内共同利用施設及び全国共通利用施設が7センターが設置されている。

北海道大学創基100周年記念式典は昭和51年9

月15日に挙行された。

III. 北海道帝国大学理学部の創設²⁾³⁾

我国において大学のあり方に関する論議は従来から盛んであった。その論議の盛んになったのは一つには産業界からの人材の養成についての要求であり、他方では大学の目的からであった。大学に職業教育を求める面と学問の場であるとする理念との相反する面とであった。そしてこの二面がはげしい争いとなって大学人を混乱におちいらせた。この様なことはかなり以前より始まっていた。大学に於ける理学部の歴史を見ると大学に於ける学問的位置と社会的位置づけをよく体现していると認められる。太平洋戦争以前において理学部は旧帝国大学にしかなく、学問の研究と教授とが行われているとみなされている。然し昭和になってからの設立された理学部のほとんどは科学に当時の社会的要請（産業的及び軍事的）と切れ離すことのできない背景のもとに設立され、そこであげた学問的成果は社会的要請に答えたものが多かった。理学部の卒業生の殆んどは学者や研究者になることなく会社等に就職するための者が多くなってきた。また理学部の行う研究も産業との結びつきが強まって来た。

大正の終りから昭和にかけて、大学の理学部はわが国には東京、京都、及び東北帝国大学の3つにしかなかった。

昭和年代になり、始めに北海道帝国大学理学部の設置があり、それに続き大阪、九州、名古屋の三帝大に夫々理学部が設置された。それに続き東京、広島両高等師範学校が、東京文理科大学、広島文理科大学と夫々改名設置された。当時わが国の植民地であった台湾と朝鮮にも、台北帝国大学理農学部、京城帝国大学理工学部が設置された。両者は文部省の所管ではなく、台湾総督府と朝鮮総督府の所管であった。

大正期に存在した帝国大学で理学部を欠いていた北海道帝大においては早くから理学部を設置することが要望されていた。北海道帝大農学部の宮部金吾教授は佐藤昌介総長に理学部設置を強く進言していた。佐藤総長の決断によりこれが採用され、文部省に強く要望された。文部省の深い理解

により既存の農科大学に理科大学を併置したいと考えられていた。この時種々の事情で先に医学部を設置することになった。そのために理学部設置の意向は弱まらなかった。当時の佐藤北大総長は北海道帝大創立二周年（大正9年）記念式に於ける式辞の中に⁴⁾

……大学は即ち基礎的原理を研鑽する所の理科と共に社会的現象を考究して文物制度に及ぼす所の法文諸科を備ふることを要す。大学は寧ろ是等の諸科を併置して応用の諸科が益々其効力を發揮することを得べきものなり、本学は即ち是等の諸科を備ふる希望と抱負とを以て邁進して、その実現の日速かならんことを期待します……。

と述べて居られる。所が原内閣の高等教育拡張により北海道帝国大学に工学部が（大正13年）設置されることが決定した。工学部設置に引続いて北海道帝大に理学部の設置を文部省に要望した。その要望の一端は認められたが、関東大震災の経済的打撃による経済的窮迫のためその要求は御破算になった。しかし北海道帝大の要望の強いことを認めた文部省はこれに深い理解を示した。そして昭和2年に理学部創設のための予算566,000円が認められ、昭和5年4月に開設されることが帝国議会で認められた。この理学部の設置を推進したのは佐藤北大総長の言葉にあった様に、諸々の応用科学の基礎であり、そこにおいて諸科学の統一性が具現される基礎理学なくしては総合大学は真に総合大学としては不十分と考えられたのである。この様な理念で高等教育拡張のムードに乗ってその設置を見るに至ったのは北海道帝大の理学部であった。

北海道帝大理学部の設置の翌年大阪帝国大学理学部が設置されたのを始めとしてそれ以後の理学部は北海道帝国大学の場合と全く異なり、地元産業界の要望に大きな関係を有した。北海道帝大理学部は昭和5年に発足したがその設立の精神はむしろ大正期につながるものと考えられる。

北海道帝国大学に理学部設置⁵⁾のことが正式に決定するや大学当局では昭和2年4月東北帝国大学理学部長真島利行を委員長として創立委員会を発足させ、教官候補者の選考や其他具体的の事項を計ることとなった。

北海道帝国大学理学部創立委員

委員長	東北帝国大学理学部長	真島 利行
委員	東京帝国大学教授	山崎 直方
"	"	吉江 琢児
"	"	中村 清二
"	"	片山 正夫
"	北海道帝国大学名誉教授	宮部 金吾
"	北海道帝国大学教授	八田 三郎
"	"	吉町太郎一
"	文部省専門学務局長	西山 政猪
"	"	会計課長 木村 正義
"	"	建築課長 柴垣鼎太郎

この委員会が5月東京で開かれ基本的な事項が決定された。

理学部の建学精神については佐藤昌介北大総長の理学部開学式の式辞の一節にある。

……凡そ教育機関は唯に建築物内外の美観を以てその誇りとする訳には参りませぬ。篤学にして研究心に富む済々たる多士あるをもって誇りとすべきことにあります……

……わが理学部は研究心の鬱勃たる新進気鋭の同僚を迎えることを得ましたのは感謝にたえぬ次第であります……「北海道大学新聞」

つまり理学部の設置は研究を第一義とするということにあった。

教官選考の原則 なるべく若い者を集める。現在の身分は何んであろうと将来性のある春秋に富む学者を集める。農学部より来られる田所、小熊、坂村の3教授は40歳を越えているが他の教官候補者は30歳代であり、中には20歳台の人もあり、その半数はまだ学位がなかった。

昭和5年開学の時文部省では若いというので、教授任命に難色を示したが、真島委員長(学部長)は断乎として自己の主張を曲げなかった相であった。全ての教授候補者として選定された教官は教授となった。

選考の原則には特定の大学だけから採用することを避けるという方針であった。何々大学の出店のように、将来その大学以外から人を求める際にも差支えない様にとの配慮からであった。

開学式が開催される時、開学式の日付に各学科の北大理学部紀要の第1号を発表することが計画

され実施された。これは研究を第一義とする現われであった。北大理学部の存在を学界に認められる第一歩であった。

教授候補者の選考 選考は先に書いた選考方針によって教授候補者の具体的選考が昭和2年より始まった。選考されるに従って選考された者は随時文部省在外研究員として夫々二年間の在外研究を命ぜられて海外に出張した。

選考された者は次の如くであった。

数学科 ○吉田洋一, ○河口商次, ○功力金次郎

物理学科 ○中村儀三郎, ○茅 誠司, ○中谷宇吉郎

化学科 ○杉野目晴貞, ○太秦康光, ○柴田善一

地質学鉱物学科 ○鈴木 醇, ○長尾 巧, ○原田準平

植物学科 ○山田幸男, ○松浦 一

動物学科 ○内田 享

この外海外研究員経験者よりの候補者

化学科 ○富永 斉

地質学鉱物学科 ○上床国夫

○印は講座担当予定者を示す。

さらに北海道帝国大学他学部より配置換え或は兼任(1名)となった教授予定者

物理学科 ○池田芳郎(工学部教授)

化学科 ○田所哲太郎(農学部教授)

植物学科 ○坂村 徹(同上)

動物学科 ○小熊 稔(同上)

動物学科 ○大飼哲夫(同上, 兼任)

新設理学部は6学科25講座であり、21講座を新設し、あと4講座は農学部及び工学部との共通講座にする予定であった。3ケ年を経過し学部が発足するに当たり、学部は講座によってなるもので共通講座は不可との文部省の反対があり、新たに選考された講座担当教授17名と共通講座の教授4名を加え21名に終った。そして大飼農学部教授は兼任ということになった。新設講座21という計画と異なり4講座が欠けたことになった。これが理学部完成後教授会の問題となった。

教授候補者の在外研究中、昭和4年4月27—28日に農学部教授田所哲太郎が海外出張の名義でア

メリカ経由で渡欧し、巴里で在外研究員を集めて合議が開かれた。主なる議題は理学部規定や予算のこと等であった。後にこの会議を巴里会議と称している。この会議に出席された者は次の14名であった。

巴里会議出席者

数学科 吉田洋一, 河田商次, 功力金二郎
物理学科 中村儀三郎, 茅 誠司, 中谷宇吉郎
化学科 田所哲太郎, 杉野目晴貞, 柴田善一
太秦康光

地質学鉱物学科 鈴木 醇, 長尾 巧, 原田準平

植物学科 山田幸男

植物学科の松浦 一はこの頃アメリカに居り、動物学科の内田 享はこの後に渡欧した。

学部開学一年前にその教授候補者が多数集まって遠い外国で会議を開いたことは恐らく空前絶後のことであろう。始めて会うものも少なくなかった、従って其後同じ職場で働く者同志の交歓親善という面では極めて有意義であった。

理学部創設費 創設費は記録によれば、1,966,047円であり、建物の新営費は1,381,950円であった。今日の物価より見れば驚く程の小額であった。理学部は鉄筋コンクリートの3階建て、その完成以前には、札幌に1軒鉄筋コンクリートの建物（当時の札幌鉱山監督局）があったのみであった。

創立費の1,966,047円のうち実際に政府が支出した額は966,047円で残りの100万円は北海道大学の維持資金（演習林を処分したもの）より支出されたものであったということである。設備費は昭和3年度に20万円、4年度に30万円合計50万円であった。そのうち4年度分から5万円が節約された。そのためその節約高は開学後経常費にて埋合せし各教室では苦労した。

理学部の建築 理学部の建築工事は北大営繕課長萩原淳正の設計指導の下で行われた。当時の北海道大学の殆んどは木造建であり、また札幌市内にも本格的な鉄筋コンクリートの建物は当時の札幌鉱山監督局の庁舎があったのみであった。萩原課長も鉄筋コンクリートの建物を手がけるのも初めてのことであったので、ずい分苦労された。

さてまづ敷地であるが、最初案では工学部の

北側であった。応用科学的な学部即ち農学部、工学部、医学部の中心である理学部がキャンパスの北側に偏在するのは感心出来ないという意見にて結局現在の位置に変更された。かつて恵迪寮のあった西側に決まった。

しかしその土地の土質がよくなく、第1に地下水面が浅かったので地下室を設けることは、不可能となった。地盤が軟弱なので何百本もの松杭が折ちこまれた。

理学部屋上は平らな陸屋根であり、周囲の樹木は低かった。屋上に積った雪が風で吹き飛ばすことを予想した。実際にはそう簡単ではなく屋上の積雪は溶けてコンクリートの割れ目から内部に浸みこみ、いわゆるスガモリをなし、また天井を必要以上に厚く仕上げたため、それが数年後に剝落してテーブルを破ったこともあり、後年陸屋根の修理や剝落した天井の修理に毎年費用をかけた。またコンクリートを早く固めるためコンクリートにニガリが用いられた。そのため鉄の水道管や瓦斯管や排水管が腐蝕したりした。しかし萩原課長はコンクリートの建物で、実験室の入口をドアでなく曳き戸にしたのは始めてだと云っていた。

本館は鉄筋コンクリート三階建てコの字形をしていた。その内側に鉄筋コンクリート四階建（本館と同じ高さ）の図書館兼閲覧室と木造の工場（機械工場、硝子工場、石工室、木工室、化学実験室及び配電室よりなる）の附属屋があった。

図書室は1階は工場、2階は植物学科と動物学科の図書室、3階は物理学科及び化学科の図書室、四階は数学科と地質学鉱物学科の図書室に振り当てられた。所が数学科の教授は自分達が教授候補者となった節創立委員の先生より将来数学教室は本館の室と図書室とが割り当てられるとのことであった。従て四階の図書室は数学科で使用するのでとのことを教授会で強く主張された。種々討議の末その申出の通り承認し、四階にあった地質学鉱物学教室の図書室は三階に移転させられた。

二ケ年を要しスクラッチタイル及びテラコッタ張りの堂々たる「ローマネスク」を加味した近代式の建物が緑のエルムの間に見えかくれする茶褐色三階建の建物が完成した。北海道大学の一偉観

であり、他学部より羨望の眼で見られた。

本理学部の建物の著しい特色は学部内の6学科が一つの校舎の中に共存していることであった。これにより各学科間の連絡並に研究上に大きな便宜があった。更に研究の能率増進はもとより経費の節約能率増進の時代的趨勢にも遇合することができた。

然しこれは大戦後学科増や講座増が行われる様になるまでであった。

数年前鉄筋コンクリートの耐用年限が来たので点検するとまだ使用出来るというので二重窓やサッシュを新しくし、面目を一新した。

学生定員 開学当時は北海道帝大に予科が置かれていた。然しそれは農、医、工の三類であった。理学部は建前として予科を置かず全国的に高等学校、専門学校の卒業生を收容する方針をたてた。勿論北海道大学の予科卒業生で理学部入学希望者は收容した。その学生定員は次の如くであった。

学 科	学 生 定 員
数 学 科	10名
物 理 学 科	15
化 学 科	15
地 質 学 鉱 物 学 科	20
植 物 学 科	10
動 物 学 科	10
計	80名

地質学鉱物学科の学生定員は20名であった。所が昭和5年の第一期、昭和6年の第二期、昭和7年の第三期の入学学生数を見ると定員の半数位しかなかった。

そこで地質学鉱物学科の学生定員は20名では多過ぎるという問題が起きた。このわけを調べた所東北大理学部の地質学・古生物学科の学生定員は10名で、岩石鉱物鉱床学科も10名であった。北海道帝大理学部では地質学鉱物学科なので東北帝大理学部の二学科の学生定員数を加えた20名とされたのだということがわかった。その学生定員を減少出来ないかと教授会に提案された。理学部規定で定められている数なので勝手に変更出来ない。教授会で種々論議の末10名を物理学科と化学科と

で引きうけて下さるということになってこの問題は解決した。

経常費の分配 理学部で予定講座の全てが整備され、次いで経常費の分配ということになった時、数学科以外の全ての講座は実験講座であり数学科の講座丈が非実験講座であった。

実験講座と非実験講座とは経常費が違うため学部教授会で種々検討、論議された。そして終に1講座当りの経常費は数学科1.5、化学科3.0、それ以外の学科は2.5と多数決で決定した。数学科からは猛烈な反対があった。

この比率により其後の経常費が配分されることになった。新制大学院の設立当時までこれが実施されていたが、現在はどうなっているか知らない。

教室委員（主任）の決定 最初各教室の教授は30歳代の若い人が大多数で40歳以上の教授は田所、小熊、坂村の三教授に過ぎなかった。その先輩が教室主任となり、定年まで長い間主任として居られるのでは、若いものは主任になれず、教室の若返りはもとより教室の民主的運営が難かしい、それで毎年教室の選挙で、教授1名を教室委員に選び、その年度のあらゆる教室の仕事の面倒を見ることにした方がよいとのことで教室委員制度が決められた。これは最近まで続いたが、対外的のことを考慮して教室主任と改めたと聞いている。

理学部教授の学士院賞受賞 理学部の建学精神は研究第一であるということを先に書いた。

理学部の創設期の教授達は恵まれた研究環境の中で俗世間のことに妨げられることなく、ただ一筋に研究生活を送ることができた。その結果次の方々が帝国（日本）学士院賞を受賞した。

昭和14年、数学科功力教授が帝国学士院賞を受賞した。

翌15年、化学科堀内教授が帝国学士院恩賜賞を受賞した。

翌16年 物理学科中谷教授が帝国学士院賞を、翌17年 物理学科茅教授が同様帝国学士院賞を受賞した。四ヶ年連続して理学部教授が受賞した。

昭和24年 地質学鉱物学科の鈴木教授が日本学士院賞を受賞した。

昭和33年 生物学科（動物学科）の牧野教授（二代目教授）が日本学士院賞を受賞した。さらに昭和55年地球物理学科（昭和28年増設）横山教授は日本学士院賞を受賞された。

研究第一とする理学部の建学精神からいって誠に歓ばしいことである。

IV. 理学部地質学鉱物学科の創立²⁾⁸⁾

昭和2年3月理学部創設の予算が帝国議會を通過するや理学部の建設、教授候補者の選定、それら候補者の文部省在外研究員として派遣等のことが早速設けられた創立委員会により検討され実行された。そして理学部地質学鉱物学科の教授候補者は次の如く選考され、次の様に決定された（昭和2年5月28日）

- 第1講座（地質学岩石学）（第一高等学校教授）
鈴木 醇
第2講座（地史学古生物学）（東北帝大講師）
長尾 巧
第3講座（応用地質学）（北海道帝大助教授）
上床国夫

鈴木は昭和3年3月14日文部省在外研究員を命ぜられ同年5月16日渡欧した。

長尾は昭和2年12月27日文部省在外研究員を命ぜられ昭和3年2月19日渡欧した。

上床は北大工学部助教授として既に文部省在外研究中であったが、昭和3年9月に帰国した。

残りの1名は昭和3年5月1日に決定した。

第4講座（鉱物学）（熊本第2教授兼第2高等学校教授）原田準平

原田は同年9月24日に文部省在外研究員として渡欧した。

理学部の開学の予定は昭和5年4月なのでその準備のため鈴木、長尾の両人は在外期間を短縮し、いずれも昭和5年1月末から2月始めに帰国した。そして二人とも理学部開講準備事務取扱を囑託され、開学準備のため活動された。

昭和5年3月17日は勅令第53号をもって理学部に9講座が新設されることが発表された。そして同年4月1日より理学部が開学された。そして次の様に任命された。

- 第1講座（地質学、岩石学）教授 鈴木 醇
第2講座（地史学、古生物学）教授 長尾 巧
助教授 上床国夫

となった。其時の教室の教職員は

助手、大石三郎、佐々保雄、中家郁太郎（事務）であった。

職員 研究補助員、石工、タイピスト、給仕、小使 計9名

上床助教授は昭和6年開学二年目5月に教授になられた。

第3講座（応用地質学）教授 上床国夫

原田は昭和5年11月帰国予定の所半ヶ年在外の延期が認められ、昭和6年5月帰国し同年助教授となり、翌7年5月教授になった。

第四講座（鉱物学）教授 原田準平

年 度	教 授	助 教 授	講 師	助 手
昭和5年	鈴木 醇 長尾 巧	上床国夫		大石三郎(2講座) 佐々保雄(1") 中家郁太郎(事務)
昭和6年	鈴木 醇 長尾 巧 上床国夫	原田準平	根本忠寛 (第1講座)	大石三郎(1講座) 佐々保雄(2") 渡辺武男(3") 中家郁太郎(事務)
昭和7年	鈴木 醇 長尾 巧 上床国夫 原田準平	大石三郎 (第2講座) 吉村豊文 (第4講座) (8.1)	根本忠寛 (第1講座)	佐々保雄(1講座) 渡辺武男(3") 志賀武彦(4" , 退職) 中家郁太郎(事務)

かくして予定通り4講座が一応完成した。原田は昭和6年に帰国したため、開学第1学年目の講義及び実験は東京帝大理学部伊藤貞市助教授が非常勤講師として鉱物学を教授された。

昭和5-7年度理学部地質学鉱物学教室の教官充足状況は前頁の如くである。

かくして教室の教官も官制上一応完成した。しかし昭和7年中に志賀助手は病気のため退職され、その代わりに東京帝大助手吉村豊文が助教授として昭和8年1月に着任された。

V. 北海道帝国大学理学部創立当時の北海道の地質⁵⁾及び地質調査⁶⁾の概要

北海道の地質の概要

北海道の面積は78,500平方 km で本邦全面積の約21.5%に達している。本邦の最北に位置し、北海道庁によって管轄されている。

本道の地質を大観すれば、大体石狩低地体を境とし西北海道と東北北海道とに二分される。

西北海道は東北日本帯の北への延長部と考えられ、東北北海道は総ての点に於いて西北海道と異なり北海道特有の性質を示す地質を示している。

北海道を構成する地質を通観すれば大体次の如く大別出来る。即堆積岩層としては、日高層、神居古潭岩層、侏羅系、白堊系、古第三系、新第三系及第四系である。これらの岩層中に見られる火成岩の主なるものは、深成岩類として花崗岩、閃緑岩、斑岩、蛇紋岩で、火山岩としては流紋岩、安山岩、玄武岩である。

日高層は日高、十勝国境に沿う北海道の脊梁山脈をなして、略南北に延長し発達している。本岩と同様のものは西北海道渡島半島の西半部にも所々に分布している。本岩層中に深成岩類の貫入があり、その附近には特殊な交代作用による深成岩、導入片麻岩、接触変成岩等が広く分布する。殊に日高変成帯として研究されたが未だ時代が決定し得ないので日高層と呼ばれている。

神居古潭層は東北北海道の脊梁山脈に沿うて略北々西より南々東の方向に細い帯状をなして分布する。殊に石狩川沿岸の神居古潭峡谷に標式的に分布する。本岩層は各種の結晶片岩類よりなり、

これらの各種の片岩類は多量の蛇紋岩及び少量の輝緑岩により貫入されている。殊に進入した蛇紋岩の接触変質帯に学術的に興味ある鉱物を含む岩石及鉱床が賦存する。この超塩基性岩に附属する鉱床(クロム鉄鉱等)も存する。

侏羅系は東北北海道の北見、十勝地方の小区域に発達する。

白堊系は脊梁山脈の西側に略南北に走った地帯に発達する。本系は東北北海道地帯のみに賦存し、石狩幾春別附近にて標準化石であるアンモナイトが多産する。

第三系は東北北海道の脊梁山脈の東西両側を始め、釧路地方並に西北海道の渡島半島に著しく分布する。本道に於ける本系は白堊系を不整合に蔽い、道内に発達する岩層中最も広い面積を占めている。本系は時代により古第三系と新第三系とに二分される。

古第三系は脊梁山脈の西側に略南北に連なり夕張、空知及び函館の諸炭田に於て多数の夾炭層を挟んでいる。又釧路地方の諸炭田もまた古第三系に属する。

新第三系は古第三系を不整合に蔽い広く道内各地に分布している。部分的に含石油層を含む。西北海道の渡島半島の新第三系中に茅沼炭田の夾炭層や各地に見られるマンガン鉱床や黒鉛鉱床が胚胎する。

第四系は時代により洪積層と沖積層とに二分される。洪積層は道内に普く見られ海成段丘や河成段丘を多く構成する。また石狩、十勝平原の周辺に見られる広い丘陵又は開析扇状地として広く発達している。海岸及び河川の堆積層中には砂鉄、砂チタン、砂クロム、砂金、砂白金を含むことがある。

本道の火成岩中の深成岩として主要なものは、花崗岩、斑岩類、超塩基性岩等がある。

花崗岩類及斑岩は日高、十勝の国境に沿う脊梁山脈地帯に発達する。西北海道に於ては小露出しか見られない。

深成岩中超塩基性岩は橄欖岩及び蛇紋岩によって代表される。橄欖岩は主として日高帯中の小区域に露出するが、蛇紋岩は略南北に走る地質構造線中に進入したものや神居古潭帯の岩層に沿って

広範な分布をしている。蛇紋岩はクロム鉄鉱、石綿、白金金属鉱物、ニッケル鉄鉱の母岩として重要である。

北海道の各地には広く多量の火山岩が分布している。それ等火山岩類に噴出時代により新期のものと古期のものとに二大別される。

新期火山岩は主として輝石安山岩の性質を示すものが多く、その熔岩は種々の火山碎屑物と組合って円錐形の標本的火山形態を構成している。

新期火山岩類には、硫黄、褐鉄鉱、マンガン鉄鉱等が関係するものがあるが重要な鉄床はない。

古期火山岩類は安山岩、変朽安山岩、石英粗面岩等であり、集塊岩及び凝灰岩を伴うことが多い。

これ等は新第三紀から第四紀初期に噴出したものが多くの場合特有な火山形態を示さず不規則な分布をなす。古期火山岩類中に金、銀、銅、鉛、亜鉛、水銀等重要な金属及び非金属鉄床と密接な関係を有するものが多い。

この外主として火山岩類よりなる千島列島が北海道とソ連領カムチャッカ半島に鎖状に分布する。その島数は約15~20であるが、現在はソ連領となっている。

石地質調査の概況⁶⁾

地質調査研究は国土開発の根底をなすもので国家産業の基礎を確立することができる。

北海道に於てこの種の調査機関が従来設けられず、また中央官庁の調査研究も内地各県よりも劣っていたことは極めて遺憾であった。

顧みると北海道に於ける徳川時代の地質調査は現在の八雲鉄山附近の調査があったに過ぎなかった。明治時代になって開拓使によってライマン氏の調査があり、その後北海道庁の技師であった神保小虎其他二三の人により二三の特殊調査報告があったのみで、一般地質の基本的調査は等閑視されていた。特に北海道は地理的關係から他府県に比し地質調査に洩れたものが多かった。地質調査所の20万分の1地質図は勿論これに次いで刊行された7万5千分の1地質図の企画からも除外されていた。

唯僅かに明治43年度から臨時費を得て、鉱物調査事業が開始され北海道から調査に着手した。まづ北海道を取り上げた理由は次の如くであった。

北海道に於ける鉱業地は既に世に知られたものが多いが、石狩空知地方の炭田を除けば、従来の調査は甚だ不十分であり、其価値如何を判断することが出来ない上、北海道は人跡未踏の所が多く、この未知の地域を探究すれば大いに得る所があるに違いないとのことであった。そしてこの度の鉱物調査は20万分の1地質図から北海道を除いたのを補う意図が明白であると記されている。

鉱物調査は先に述べた明治43年に開始され、昭和5年迄続き報告書がNo. 37まで刊行された。従って北海道の拓殖事業を進展させる上、油田、炭田、金属鉄山の開発、土地の利用並に土木事業其他の施設をなすに当り十分な計画をなすには其の基礎調査の不十分さは免れ得なかった。

北海道帝大の工学部や予科に在職された地質学者である教官や、札幌鉄山監督局や北海道庁其他二三の規模の大きい炭山等に勤務する地質専門の技術者を加えてもその数は少なかった。この様に基礎調査が欠けていたので、組織的な地質図幅調査を北海道庁自らの手で行うことになった。そして昭和4年北海道工業試験場内に資源調査部が設置され北海道帝大工学部福富忠男教授の指導の下に道内松前地方より調査を開始し、附録の地質図を10万分の1として附された。同資源調査部は国費にて運営されていたので規模は小さく、調査の進捗状況もはかばかしくなかった。その事業のその後の発展は昭和5年に北海道帝大理学部地質学鉱物学科が設置された後でその学科の教官の後援並に昭和8年以降北大の地質学鉱物学科の卒業生の参加により一段とその事業は進展した。

然し終戦後昭和22年閣議にて長期計画の事業は政府直属により行い、短期計画の事業は自治体で行うということが決定された。これにより国費にて運営されていた工業試験場の資源調査部は商工省地下資源調査所（現在の工業技術院地質調査所）に合併することとなった。

先に記した政府官庁の刊行する7万5千分の1地質図第1号（庄原）は昭和10年刊行されたが其発行は不定であった。

地質調査所（工業技術院）の基幹業務の一つであった7万5千分の1地質図幅調査が昭和21年から再開された。しかし7万5千分の1の縮尺は利

用者にとって不便であり、また調査者よりはより高精度の内容が望まれたので、昭和24年度に5万分の1の縮尺に切り換えられた。

7万5千分の1の地質図は昭和33年に刊行された鬼首図幅が最後となった。そして昭和27年に5万分の1地質図幅第1号（三河大野）が刊行された。其後その刊行数は増して行った。昭和42年5万分の1地質図幅説明書は地域地質研究報告と改称された。

昭和5年北海道帝大理学部が設置され、同学部に地質学鉱物学科が創設された。この時上に記した様に北海道においては地質基礎調査が不十分であることが明らかとなった。道立工業試験場の資源調査部による有用鉱産物調査及地質図刊行も同様であった。そこで地質学鉱物学教室内に北海道地質調査会を設け教官学生が一体となって地質調査及び10万分の1の地質図をつくることとなった。この北海道地質調査会のことについての詳細は後に記する。

VI. 地質学鉱物学教室草創の頃の研究成果²⁷⁾⁷⁸⁾

地質学鉱物学科の教官達は研究や学生の教育に従事した。従来比較的軽視され勝ちの北海道を見直す傾向が日本全体に漲ってきた。未鮮明の層位や地質構造や地下資源等が解明されたことは本邦の地学界にとって大きな寄与であった。

昭和5年鈴木 醇が北大教授として北海道に來られてからは神居古潭岩層の結晶片岩とそれに関連する蛇紋岩に興味を持たれ、その変成度が三波川系よりも御荷鉾系に近いものとして両者の比較研究に没頭された。従って学生の卒論として御荷鉾系の調査をされたが、自らも内地のこれらの発達する地域に赴かれ研究された。

鈴木教授は変成岩の研究の間にも三波川系結晶片岩に伴う蛇紋岩や神居古潭岩層中に進入した蛇紋岩に関心をもたれ、特に神居古潭岩層の結晶片岩中に産するアルカリ角閃石、アルカリ輝石の生成と蛇紋岩進入に伴うアルカリ溶液の関係を重視されて居られた。

当時本邦のクロム鉱山は北海道に多く、また新たな鉱山が増加する時期であった。クロム鉱床は

例外なく蛇紋岩中に胚胎し、その成因は正岩漿時代の分化鉱床とされていた。

その世界的にも余り進んでいなかったクロム鉱床の研究に、鈴木教授は興味をもたれた。本邦各地のクロム鉱床の調査研究のため講座の教官及び学生を指導された。

蛇紋岩に伴う分化脈岩の曹長岩、トロニウム岩、捕獲岩のようなロジン岩等の優白岩類を本邦で初めて記載され発表された。更に蛇紋岩に特有な鉱物のクロム鉄鉱、温石綿、白金等の外ニッケル鉱床の研究等にも努められた。超塩基性岩に伴う鉱床とともに、母岩の蛇紋岩、橄欖岩の研究にも目を向けられた。

これらの研究は後に（昭和24年）日本学士院より「超塩基性火成岩及びそれに伴う諸鉱床の研究」に対し学士院賞が授与された。

先に記した様に東北北海道地域に発達する中生層の層位学的研究や地質構造等に未解決の多くの問題を有していた。

層位学専門の長尾 巧教授は教授赴任と同様に、これらの中生層の研究は勿論石狩炭田の下部第三紀層の夾炭層の層序及びその地質構造特に夾炭層の押し被せ構造の研究を進められた。長尾教授のこの問題についての研究は東北帝大在職時代よりの継続研究であった由である。その古第三紀層中の古生物については第二期の学生を指導して研究させた。

また中生紀層のアンモナイトの研究は第一期の学生高藤林次が研究された。

昭和8年樺太南部の気頓川流域で採取されたデスモスチルスの頭蓋骨の化石が樺太気屯の造材現場の作業員が教室へ持って來られた。当時長尾教授を始め古生物学関係の研究者は出張し不在であった。唯一人鉱物学講座の吉村助教授のみ教室にて研究していた。そこへその化石が持ち込まれた。これより先きデスモスチルスの特有の齒化石につき長尾教授が職員談話会で話しをされた。これを聞いていた吉村助教授はその特有の齒化石から、これはデスモスチルスであることを知った。この化石を持参された作業員の話しでは、なお岩塊の中にまだ胴体の骨のあるものが河中にあるとの話しであった。その頭蓋骨及び齒化石は現金250

円で教室が入手した。なお川の中にある岩塊中にある胴体骨格を採取するため、長尾教授の講座全員が昭和8、9年の二度現地に行った。作業員の話しの所にはなく、洪水で流されてその下流で発見された。苦心の末それを採取し教室へ運んだ。そしてその岩塊から骨核の化石を掘り出した。その間デスモスチルスと一所に亀の化石があるなどとの話があったが、それは肋骨の集まったものだと判かり、大笑いとなった。その岩塊から削り出した骨核の化石を頭蓋骨と共に研究し同一のデスモスチルスの骨格であると決定された。その古生物学的研究により中新世に産するデスモスチルスの新種と決定された。

其後昭和11年に陸軍大演習の際、天皇陛下が北海道大学農学部を大本営とされた時その骨化石を組立てて陛下の天覧に供した（現在北大所蔵）。

更に昭和12年に樺太の炭坑からニツポノザウルスの草食恐竜の骨格が長尾教授によって発見された。

長尾教授は佐々助教授と共に西南北海道の第三紀の層序の研究と従事され、約5ヶ年の結果見事な成果を得られた。その層序は勿論地下構造を明らかにした上、地下資源については同地域に存する金属鉱床の成生時期等につき極めて貢献する所が大きかった。

長尾教授は昭和16年東北帝大理学部地質学古生物学科に転任され、長尾教授の後任に大石助教授が教授となられた。

第三講座（応用地質学）の上床国夫教授は東北北海道地域の函洺砂岩層（白堊系）の油砂岩研究に従事された外、西南北海道地域の渡島半島の油頁岩層（中新統）の研究を進められた。さらに天塩の増幌油田の産油層（川端統）の研究も進められた。また昭和10年当時の樺太庁の懇請により同島の石油調査を行った。

同教授は昭和11年東京帝大工学部教授に転任された。

第三講座の渡辺武男講師は助教授となり、直ちに文部省在外研究員となり、応用地質学（金属鉱床学）研究のため渡欧された。

同助教授が帰朝されるまで第三講座は鈴木、長尾及び原田三教授によって分担された。

原田準平教授は昭和6年に帰朝し、昭和7年第4講座（鉱物学）を担当された。

独立で行った研究（本邦産ダンプリ石の研究）を拡め本邦産含硼素鉱物の研究を進めた。それと同時に北海道の鉱山に産する鉱石鉱物を研究した。また玄武岩質安山岩中に含まれる巨大斑晶をなす曹灰長石及び灰長石の研究を行った。この巨大の斑晶は西南北海道の火山地域の火山岩中に産する。また東北海道地域の輝緑岩中より我国始めの曹灰針石（ペリトライト）を発見した。これが端緒となり本邦各地に其後産することが明らかとなった。

殊に昭和14年吉村助教授の転出後は、北海道にある各種のマンガン鉱物の鉱石鉱物に就て研究を進展させた。併せて時局下発展したマンガン鉱業の発展のため努めた。

昭和11年陸軍大演習にて北海道帝大が大本営となり、更に行在所となり、北海道帝大に行幸の折、「北海道に産する特殊鉱物」を天覧に供し、御説明申し上げた。天覧に供した鉱物は（1）自然テルル、（2）酸化テルル鉱、（3）轟石（4）曹灰針石、（5）藍鉄鉱（白色のものと藍色のもの）。

第四講座（鉱物学）の志賀武彦助手が昭和7年病気となって退官されたので、東京帝大の吉村豊文助手が助教授として昭和8年始め来任された。

吉村助教授は西南北海道のマンガン鉱床及び鉱石鉱物を研究し、後志の轟鉱山より新鉱物轟石（Todorokite）を発見された。当原田教授が昭和11年天覧鉱物を採集の石狩の手稲鉱山にて採取された藍色の藍銅鉱らしき鉱物を吉村助教授が研究の結果新鉱物手稲石（Teinite）と決定された。

吉村助教授は昭和14年に商工省地下資源調査所（後の地質調査所）技官として転出された。

ソ連領カムチャッカ半島より北海道へと一連の島が連なっている。それは千島列島である。この千島列島は20～15の島嶼よりなり北、中、南の三地域に分けられていた。北及び南千島は開放されていたが、中部千島は閉鎖され、住民はなく、農林省の養狐場として使用されていた。封鎖された中部千島の各島には農林省の番屋があり養狐の番人が生活していたに過ぎなかった。農林省の監視船、白鳳丸や新知丸が夏季これらの島々を巡視し

番人の食糧、養狐の食糧を配布したり、養狐の毛皮を集荷していた。この海域の漁業も禁止されていた。

千島列島の地学的研究は極めて少く、従来神保小虎其他数人の先輩による断片的報告があったに過ぎなかった。

昭和5年夏佐々助手は当時予科のドイツ語教師のアーノルド、グブラーと共に北千島の幌筵島等の三島に行かれた。そして翌年は南千島の色丹島に渡った。これは概査であったが其の後の教室の千島調査の端緒となった。

昭和7年根本忠寛講師と学生石川俊夫が中部千島ウルップ島の調査を行った。これが教室の千島調査の開始となった。

昭和8年7～9月鈴木教授、根本講師、渡辺助手とがウルップ島に渡り、同年9月原田教授は根本講師と学生と共にシンシル島に渡った。同島の緑湖火山（現在のザバリキキーカルデラ）は三重火山であり、緑湖は塩水湖であることが明らかとなった。昭和9年と10年には根本講師は学生と共にウルップ島に渡って一層深く調査された。昭和11年には根本講師は学生と共にシンシル島、ケトイ島の調査をなした。昭和12年根本講師はウシシル、ラシヨワ、マツワの諸島の概査を行った。根本講師は昭和12年秋北海道立工業試験場技師に転出された。そして新設された北海道庁千島調査所に兼務された。

昭和14年には北大から鈴木教授、長尾教授、大石助教授、石川助手、湊助手、北海道立工業試験場から根本技師外1名、北大学生9名が調査隊をつくり、国後島の地質概査を行った。昭和15年には原田教授を団長として石川助教授、湊、石橋、藤岡等の助手に北海道立工業試験場の根本技師と、学生が11名で調査隊をつくり、エトロフ島を南端より北端まで地質調査の概査を行った。

昭和16年北千島、幌筵島、占守島、アライ島の調査を鈴木教授を団長とし、石川助教授、湊、大立目助手と工業試験場の根本及び斉藤（正）技師、学生11名で、その概査を行った。

上記の様に南千島、中部千島及び北千島は一応概査されたが、中部千島のうちシャシコン、ハルムコタン、オンネコタンの三島は全く未踏査に終

った。調査は主に予察または概査であった。この千島調査が実施されたのは農林省の監視船を利用したので出来た。農林当局者の深い御理解により御協力を得たので実施出来たのである。深く感謝する次第である。調査は主に予察または概査であった。太平洋戦争の勃発のため調査は未完成のままになってしまった。その上終戦とともに、千島全域はソ連領となつてしまい、昭和5年より16年までの長きに亘った地質調査の続行は不可能になってしまった。誠に遺憾なことである。

VII. 草創のころの教室風景

入学学生数

草創のころ入学した学生の数及び卒業生数は次頁の如くである。

卒業生の就職

第1回（昭和5年度）の新入学生は12名であったが休学3名、退学2名、転学1名となり実質的には6名の学生が教室に残り3ヶ月勉強し昭和8年3月卒業することになった。

教室の教官一同はこの卒業する学生の就職することについて相談をした。

学生を三ヶ年我々がよく教育したので、出来る文教室には残さず世間に出して北大卒業生の真価を見て貰った方がよいということになった。第一回卒業生は従って一人も助手にならず教室には残らなかった。北海道工業試験場及満州に夫々就職した。

地質調査の本山である地質調査所は従来殆んど東京大学の卒業生のみ採用していた。しかし其後これが改められたと聞いて鈴木教授とともに当時の山根所長に面接し、北大卒業生も地質調査所に入所させて頂きたいと陳情したことがあった。その時入所したのは多分昭和16年（前期卒業）の梅沢邦臣であったと思う。

それ以後北大出の所員も増し昭和60年の今日、沢所長、垣見次長を始めとし部長級数名の首脳部を形成するに至った。誠に慶賀に堪えない。この様なことが次第に他大学にも及ぶことだろう。

最近は鉱業界が不振のため鉱山会社に就職することが昔と比して少くなった。その代わり技術士制度が確立され広く実施されている。

昭和 入学年度	入 学 志 願 学 生 数	減 員	入学した学生	卒業した学生	卒 業 年 次
5年	12人	6 { 休 学 3 退 学 2 転 科 1	6	6	昭和 8年
6	5	2 (退 学)	3	3	9
7	9		9	9	10
8	3		3	3	11
9	7	2 { 転 科 1 退 学 1	5	5	12
10	5	1 (転学)	4	4	13
11	6	2 (兵役)	4 + 2	4	14
12	3		3	3	15
13	9		9	9 + 2	16 (前期)
14	11	1 (退学)	10	10	16 (後期)

クラス会⁷⁾

草創の頃の数授連中は若ったのでよく学生が私宅を訪問して来た。これについてある期の卒業生が次の様な話しを同窓会誌である古潭会誌に匿名にて発表した。

同じ学級の学生は4名しかいないのでクラス会を開いても金は集らないので、金のかからない方法でクラス会を開くことを考えた相だ。その方法は四人揃って各先生方のお宅を訪ねることにした。そして先生の会計でクラス会を開くことにしたということであった。それを実行した相だが、先生宅を巡り切れない間に卒業することになってしまった。従って自費で開いたクラス会は入学以来僅か二三回であった。先生方に厚くお礼を申し上げるという一文を古潭会誌に発表した中々ちゃっかりした学生グループがいた。

雑誌会

雑誌会は学生にとって正課の授業と同様に意義あるものである。外国及び国内の新刊雑誌の論文を読みそれを紹介するのであり、学生にとっていい勉強の場である。併せて札幌の北大以外の地質学者の顔合せ懇親会のようなものであり、北海道の地学ニュースを知る場所でもあった。会は学生二人の幹事で運営されていた。学生で内外の新刊雑誌の論文を紹介するもの2人、教官や来賓で話

しをするのが数人というのが常態であった。会場には菓子、果物、牛乳等が毎回準備された。そして毎回20～30名が出席した。そして毎週一回開かれた。

その第1回雑誌会は昭和5年6月12日に開かれた。毎週開かれたので昭和9年6月12日に第100回、14年5月30日に第200回記念雑誌会が開かれた。大東亜戦争後雑誌会は各講座で催す様になり現在まで続いている。

ハンマー祭

鈴木教授が歐洲の大学で行われていた同様の考えから思いつかれ、昭和8年12月16日第1回のハンマー祭が開催された。それから毎年年末にその年のハンマーの活躍を慰労するためハンマーを祭って御神体とし、未婚清浄な教官が祝詞を奏上するのに始まりあとは余興が学生によって行われた。そして教官、学生、来賓が学生と一所になり無礼講に過ごした。在札の地質学者は殆んど皆参加し、ハンマーに感謝して、その年の地質調査の成果を祝った。初めの頃は酒は用いなかったが、後には天ぷらやおでんの出張サービスがあり、夜11時頃まで余興が続いた。戦後数回行われたが、新制大学に切り変ってからはハンマー祭は消えてしまった。

職員雑誌会

昭和8年1月21日雑誌会とは別に纏まった論文の発表や内外の新刊書の批評或は総説的な紹介のため隔週に職員を主として開かれ学生の聴講も許された。第1回は昭和8年2月2日に開かれた。そして昭和8年には13回も行われ活気を示した。しかし残念ながら昭和15年5月31日まで31回開催されたがその後の記録はない。誠に有益な会合であったが多分時局多端になる状況で中止されたものであろう。

職員談話会に於て紹介または報告されたものの一部を挙げると次の如くである。

渡瀬正二郎(札幌鉱山監督局技師)：……北海道で最近発見された Nugget 及び占冠鉱山に就いて

根本講師：十勝国産コメンド岩

佐々助手：日本に於ける氷河問題について

長尾教授：日本の古第三紀層

原田教授：鉱物の分光学的研究の概要

吉村助教授：石灰一鉄一珪素系について

鈴木教授：ハーカー著 変質作用Ⅱの紹介

上床教授：満洲国の油頁岩鉱床について

田上北大予科教授：頁岩水素イオン判定と其参考文献について

原田教授：ホッフマンの鉱物の色彩に関する最近の研究

吉村助教授：樺太産炭酸鉄鉱

田上予科教授：南樺太の新第三系の層序について

大立目助手：石狩炭田の構造

春梢会

理学部三階南側の南西隅に常時新に到着した学術雑誌が陳列され教官及び学生の閲覧に供していた。開学当時から雑誌室と呼ばれていた。この室の中央にある大きなテーブルは当教室教授の食堂になって居り、昼食に皆集まった。弁当を持参するもの、近くの食堂より昼飯をとり、四方山の話しをしながら昼食をとることにしていた。鈴木教授は昼食を取らず、リンゴだけを食べたり、やせる菓をのんだりしていた。そしてこれは肥満体の食事療法だと称していた。

太った鈴木教授と痩せた長尾教授とはよいコントラストをなしていた。又鈴木教授の暑がりと言

村助教授の寒がりも両極端であった。

食後の話しは内外の学界の新しい話題から各地への旅行談、また新しいフィールドの知見等、岩石、鉱物から地質、古生物への話しが披露された。

現在という情報交換の場であり、新知見吸収の場でもあった。昭和9年12月頃この会合に命名したらばという話が起り、名称の募集が提案された。種々の名称が出されたが、結局吉村助教授の命名の SHUNN SYOW 会では如何かということになった。その命名は、Suzuki, Harada, Uwatoko, Nagao, Nemoto, Sasa, Yoshimura, Oishi, Watanabe という当時の教官連中の姓の頭文字をとったものである。皆これに賛成したが、日本文字ではどう書くかということが問題となり、種々討議の末鈴木教授の提案の「春梢会」という名前に結着した。そしてこれを昭和10年1月より使用することになり、日記は吉村助教授がつけて居られた。

そしてこの春梢会という名称は戦時中まで用いられていたが、戦後食糧不足の時代になり、弁当を持たずに登校する教授が次第に多くなり昼に食堂への集まりが悪くなった。

春梢会の名称の中に姓の入っていた、長尾、上床、根本、吉村、渡辺等の教官が教室から他に転出したのでその名称は自然に消滅してしまった。春梢会は教室の草創のころの卒業生の昔語りになってしまった。

古潭会⁷⁾

教官、学生、卒業生の親睦連絡機関(俗に云う同窓会)をつくる計画が起り、教官、学生及び在札の卒業生が理学部倶楽部に集まって同窓会創立相談会が開かれたのは昭和11年3月7日であった。同窓会の成立は一同異議なく賛成となった。そして同月23日鈴木教授の命名により「古潭会」という会名に決定した。そして昭和11年6月15日に古潭会々報第1号が発行された。同号に鈴木教授の「古潭」の命名が記されている。以来古潭会報は号を重ね昭和14年7月教室創立十周年のお祝いに会報第10号記念号が発行された。昭和16年太平洋戦争が進展し、この種の同窓会の存続は困難となった。一応従来の古潭会を解散し、時局に応

じた同窓会をつくりその名称を募集した。所がやはり古潭会という名前がよいということになった。よって従来の古潭会報を古潭会誌と改めた。そしてその会誌は昭和20年12月刊行の第24号まで連綿として続いた。

唯以前は会長制でなかったが、改組後は会長、幹事が必要となり会長には鈴木教授がなった。その後は会誌の刊行が困難となった。

教室創立準備時代よりほぼ敗戦までの教室の日記は古潭会報、古潭会誌に完全に集録されている。

会誌は其後発行されていないが、本邦各地で開かれる卒業生の集会には古潭会懇親会として開かれている。東京古潭会は卒業生が最も多い東京に設けられ古潭会の中心となっている。

北海道地質調査会⁸⁾

昭和5年北海道帝国大学に理学部が創設され地質学鉱物学科が設置されることになった。地質学鉱物学科における地質学者と工学部農学部及び予科の地質学者をもって一九とし、更に札幌鉱山監督局、北海道庁、皇室林野局の協力を得て北海道の地質の基本調査をすることができるようになった。これが北海道地質調査会の設立の動機となった。そして昭和6年北海道地質調査会が設立された。会長には北海道知事、常務理事には田所理學部長、理事は北海道庁の関係部長、札幌鉱山監督局長、皇室林野局札幌支局長の5名となり、委員には関係の諸官庁の課長及び技師さらに北海道帝大の教授及び助教授26名がなった。そしてその事業としては地質一般調査、炭田、油田、金属及非金属鉱床の地質調査、有用鉱物及び岩石の調査、火山、地震其他の地変の調査、地下水及び鉱泉の調査、地質図作製、調査報告書の出版等であった。

そして先づ昭和6年の事業として、北海道庁農務部の委託による十勝国十勝川本支流々域と広尾附近の地質調査をなすことになった。十月末より十一月初旬に亘り教室の教官及び学生が一体となって前記の地域の地質調査をなした。

この調査の結果は北海道地質調査会報告第1号(10万分の1、然別湖図幅及び其説明書)が刊行された(昭和7年6月)。引き続き第2号(10万分の1帯広図幅及び其説明書)が昭和8年5月出版

された。

本会の事業を遂行し、またその会を運営する財源はなかった。十勝地域の調査に際しては北大の関係教授が北海道庁の嘱託となり支給された嘱託費を調査費用としていたので十分な活動ができなかった。

そこで本会を財団法人とすることが発案され種々検討された結果、昭和9年1月22日財団法人の認可が得られた。理事長は田所哲太郎(理學部長)がなり、理事には、鈴木 醇、長尾 巧両教授、監事には上床国夫教授、評議員には原田準平教授がなった。財団法人の財源として田所理事長が札幌の私宅を寄附された。そして今迄北海道地質調査会報告として刊行されていたものは、この時より財団法人北海道地質調査会報告となった。そしてその最初に刊行されたものは十勝地域の地質調査の成果であった報告第3号(10万分の1大樹図幅及び其説明書(根本忠寛及佐々保雄著)、であった。引続き第4号から順次刊行され、草創のころには第11号(昭和15年9月)まで発行された。第4号から第7号までは、

北海道地学に関する文献目録(Ⅰ)著者別(第4号)、同上(Ⅱ)部門別(第5号)、同上(Ⅲ)地域別(第6号)の3冊であった。

第7号(昭和10年11月)は 原田準平編 北海道鉱物誌

第8号(昭和11年)、根本忠寛、渡辺武男著、得撫島図幅説明書(地質図は附されていない)

第9号は次の報告が刊行された。渡辺武男、下斗米俊夫著、北見国知床硫黄山

昭和11年の活動(昭和12年)

これまでに9号が刊行できたのは教室の教授並びに卒業生、学生に負う所が大きい。

時代に対応するため其後報告名は北海道地質要報と改められた。従来北海道に関する地質調査研究の発表に限定されていたのを広く地質学上の諸問題に関する研究成果を掲載することに改められた。そしてこの北海道地質要報の発行者を北海道地学会に変更した(昭和24年)。この北海道地学会の結成された時鈴木教授が会長となったが後に原田教授が代った。本会は昭和24年に14号を発行し、昭和36年3月に第40号を刊行した。其後経済

的事情によって休刊した。

財団法人北海道地質調査会は昭和24年以後全然活動出来なくなった。役員であった人々は北大より転出したりまた死亡したりしたので役員であったものは原田教授（原田も名誉教授となり北大を去った）1人になったので、文部省と相談の上、昭和55年秋正式に財団法人を解散した。北海道地質調査会及び北海道地学会はその経営の行き詰りからその運営が不能となった。然し北海道地質調査会報告及び北海道地質要報が北海道の地学の進歩に寄与した所は大きかった。

VIII. 結 び

北海道帝国大学は長年に亘る基礎科学の学部即ち理学部を設置しようとする熱意とその設置に対する強い努力とが文部省の認める所となって、遂に昭和5年に理学部が設置された。我国のあり方から云って慶賀にたえない。そして理学部の中に地質学鉱物学科の外5学科が創設された。

地質学鉱物学科は学術研究機関として50余年間に輝かしい研究業績を年々積み重ね、その上有能な多くの地質学者や地質技術者を養成したことは誠に欣ばしい。

新しい理学部の各研究室には研究の活気がみなぎり、若い教官を中心として学生は向学心に燃えていた。然し一般世間は不景気風が吹きすさび、緊縮政策がとられ、昭和6年9月には満洲事変が勃発した。物情騒然となりはじめたが、教室内では落着いて研究することができた。

理学部の草創期が過ぎた昭和16年12月8日北海道帝大中央講堂にて今総長の開戦の詔勅の朗読があった。そして我国は太平洋戦争に突入した。

研究や学問を自由にすることが出来た静かな楽しかった理学部の草創期は終りをづけ、戦時体制の厳しい時代へと移りかわっていった。

注

- 1) 北海道大学創基百年史，通史，部局史，資料篇，昭和51年。
- 2) 北大理学部五十年史，昭和55年。
- 3) 日本の大学の理学部—その科学社会史的側面，広重 徹著 近代科学再考，朝日選書129，p. 179-235，昭和54年。
- 4) 創基五十年記念，北海道帝国大学沿革史，p. 187，大正15年。
- 5) 北海道の金属鉱業，地質の概要，昭和27年。
- 6) 北海道の地質調査事業はどのように進められたか，地質ニュース No. 166，（北海道支所創立20周年記念号）昭和43年。地質調査所百年史，昭和57年。
- 7) 古澤会会報10号，北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室創立第10周年記念号，昭和14年。
- 8) 鈴木 醇一人とその背景一，昭和48年。
- 9) 神保小虎(1891)：ウールップ島小誌，地学，vol. 2。
——(1892)：ウールップ島とエトロフ島との差異，同上 Vol. 3。
——(1892)：千島最近四島，同上 Vol. 4。
——(1904)：千島地勢に関する図書，地質 Vol. 11。
石川貞治(1893)：千島群島極北の地質，地学 Vol. 5。
——(1895)：千島巡検雑記，同上 Vol. 7。
横山壮太郎(1894)：一千島巡検記，同上 Vol. 6。

(1985年2月18日受理)